○展覧会構成

〈第 1 章〉　古代の土器

日本列島では一万二千年前に土器づくりがはじまった。その後、時代の変化に応じて豊かな造形美の土器がつくりだされ、古代人の思いを今に伝えている。

火焔形土器
縄文時代　前 25 世紀
新潟・津南町教育委員会

重要文化財
顔面把手付土器
縄文時代　前 25 世紀
長野・岡谷市立岡谷美術考古館

〈第 2 章〉　金属器と祭祀

紀元前 4 世紀に朝鮮半島から水稲耕作に代表される様々な技術や文化が日本へ伝わるが、その一つとして金属器がある。その放つ輝きから実用品というよりも祭祀具としての側面が強調され、徐々に大型化・装飾化するという変化を遂げた。青銅器の中でも、鏡は後の段階まで重要視され、首長の墓から出土することが多い。

広形銅矛
弥生時代 2 世紀
九州国立博物館

突線鈕袈裟襷文銅鐸
弥生時代 2 世紀
九州国立博物館

〈第 3 章〉　仏教彫刻

日本には 6 世紀半ばに仏教が伝来した。天皇が仏教に帰依し、国内で多くの寺院がつくられ、仏教は大いに興隆した。日本で展開した仏像彫刻を紹介する。

重要文化財
弥勒如来立像
平安時代　12 世紀
福岡・宇美八幡宮

毘沙門天立像
鎌倉時代　文永 8 年(1271)
東京国立博物館

〈第 4 章〉　仏教工芸

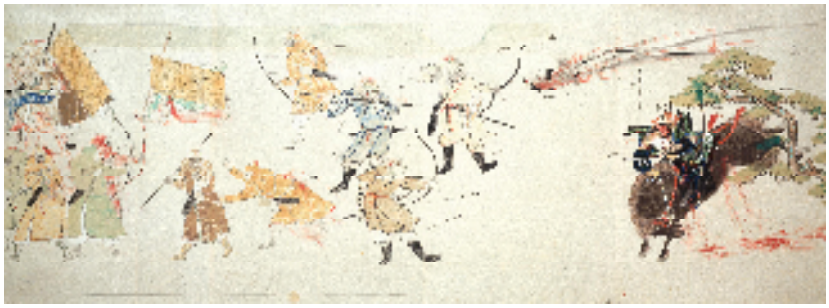
仏教伝来以後、仏事・法会に使用される供養具、僧具などが盛んに制作された。日本で花開いた仏教文化の精華を、金属工芸分野を中心に紹介する。

重要文化財
梵鐘　平安時代　貞元 2 年(977)
文化庁

重要文化財
金銅孔雀文磬
鎌倉時代 建保元年(1213)
文化庁

〈第 5 章〉　元寇

13 世紀、中国の元は二度にわたって日本に対して多くの船団を送りこみ、激しい戦闘を繰り返した。その攻防の激しさは『蒙古襲来絵詞』によって見ることができる。日本及びベトナムを征するために送り込まれた元の軍船の実態を、近年明らかになった水中遺跡の資料を通して紹介する。



蒙古襲来絵詞　模本　江戸時代　19 世紀 東京国立博物館

てつはう　中国・元　13 世紀
長崎・松浦市

〈第 6 章〉　日本とベトナムの交流史

日本が鎖国政策をとる以前、16 世紀から 17 世紀にかけて、日本からベトナムへ貿易船が派遣され、貿易港ホイアンには日本人が居住して貿易拠点として日本町を形成していた。日越が直接的に交流していた時代を当時の史料で紹介する。

異国渡海朱印状
江戸時代 慶長 19 年(1614)
九州国立博物館

朱印船交趾渡航図巻
江戸時代　17-18 世紀
九州国立博物館

〈第 7 章〉　江戸の色絵

江戸の色絵は 4 つの様式が知られる。それは濃厚な絵付が有名な古九谷様式、白の素地に赤や緑などが美しい柿右衛門様式、金を多用し豪華絢爛な金襴手様式、巧妙なデザインと精緻な絵付を誇る鍋島様式である。

重要文化財
色絵牡丹獅子文銚子
江戸時代　17 世紀中頃
文化庁

色絵婦人像
江戸時代　17 世紀後半
文化庁

〈第 8 章〉　武の装い

日本において、武具は単に身を守るための道具ではなかった。武士たちは高い美意識を持ち、自らの「いでたち」に常に意を払っていた。そのため、武具は様々な素材と高度な技術を駆使して制作された。このケースでは、武士が生み出した美術を紹介する。

重要文化財　松藤文兵庫鎖太刀拵
鎌倉時代 13 世紀　文化庁

稲富流砲術奥義秘伝図巻
江戸時代 寛永 6 年(1629)　九州国立博物館

〈第 9 章〉　古美術交換－守り伝えられた文化財

ベトナム国立歴史博物館には、日本の文化財が保管されている。それらは、昭和 18 年、日本が文化交流を目的として、ハノイに本部を置いていたフランス極東学院に寄贈した品々で、ベトナムの人々の努力によってベトナム激動の時代、多くの困難を乗り越え現代に伝わった。ここに両国の交流を記念して文化交流の歴史を証言する文化財を紹介する。

鐔（中井友恒作）
江戸時代 18 世紀
ベトナム国立歴史博物館

狂言面　武悪
江戸時代 17 世紀
ベトナム国立歴史博物館